上岡議員、中曽議員が聴く

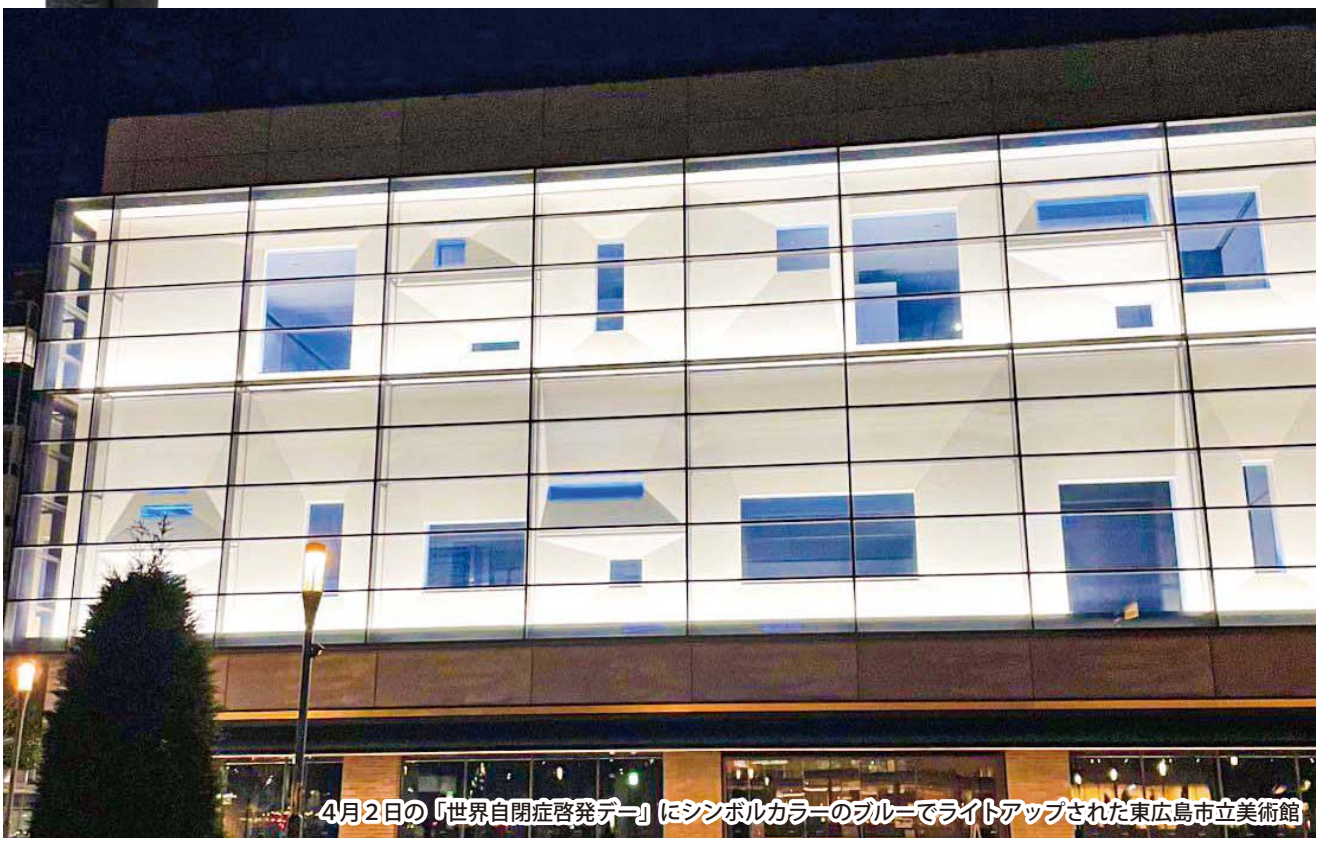
広がれ、発達障がいへの理解

気持ちを共有する家族の居場所



誰にでもある得意なこと、苦手なこと

発達障がいのある人やその家族にとって、悩みや不安を安心して話せる場所は大きな支えになります。NPO法人広島自閉症協会東広島支部では、保護者同士の茶話会や勉強会を通してつながりを育んできました。活動に関わる人たちに、これまでの経験や、地域に求める支援について聞きました。



4月2日の「世界自閉症啓発デー」にシンボルカラーのブルーでライトアップされた東広島市立美術館

同じ悩みを持つ家族とつながる場所をつくりたい

江田 子どもが自閉症と診断された頃、同じような悩みを持つ保護者と出会い、「心配なことや困っていることを話し合える場所があったらいいね」と、小さな集まりをつくりました。その後、平成

話をお聞きした「NPO法人広島自閉症協会」の皆さん



会員 植田 美和さん



理事 佐藤 麻優子さん



理事 岡本 玲子さん



副理事長 江田 久仁子さん

会員 Aさん　会員 Bさん　会員 Cさん

※一部の方は本人の希望により匿名で掲載しています。

18年にNPO法人広島自閉症協会東広島支部を立ち上げ、活動するようになりました。

岡本　こどもが診断を受けた直後は不安でいっぱいでしたが、初めて会に参加したとき、皆さんが明るく笑っている姿を見て驚きました。「笑って子育てをしていいんだ」と思えたことが、大きな救いになりました。

茶話会と勉強会 顔を合わせて話す安心感

岡本　日頃感じていることや悩みなどを自由に話せる茶話会を年5～6回、開いています。保護者の先輩から「あのときはこうした



中央図書館でのパネル展示

よ」「大丈夫だよ」と聞くだけで、気持ちが軽くなることがあります。最近は障がい者相談支援センター（はあとふる）の職員さんや心理士さんも参加してくださるように。また、年に1～2回、大学の先生などを招いた勉強会も開催しています。インターネットには多くの情報がありますが、直接顔を合わせて話すことで得られる安心感や温かさがあります。

江田　協会には、自閉症のある人やその家族だけでなく、発達に関する悩みを抱えている人も家族も参加しています。診断の有無にかかわらず、気になることがあれば、気軽につながってもらえたらと思います。

佐藤　子どもが療育に通うようになり、同じような経験を持つ保護者やスタッフに声を掛けてもらいました。さまざまな人との出会いに助けられたと感じています。

自閉症を正しく知ってほしい 早期の療育につながる体制を

岡本　自閉症という名前は知られるようになりましたが、特性や必要な配慮については、まだ十分に理解されていないと感じます。同じ診断名でも、得意なことや苦手なこと、必要な支援は一人一人異なります。まずは、本人の声や行動の背景を知ろうとすることが大切です。

佐藤　幼い頃から適切な支援を受け、本人も家族も特性を理解することができれば、生活の中の困り事を減らせます。また、大人になった今も特性と向き合いながら生活していますので、温かく見守っていただけたらと思います。

江田　子どもだけでなく、家族も安心して相談できる場所が必要です。医療、福祉、教育などの関係者が連携し、子どもから大人まで切れ目なく支えてもらいたいと思います。

植田　誰もがそれぞれに得意なことや苦手なことを持っています。違いを否定するのではなく、その人に合った伝え方や環境を一緒に考える地域になってほしいです。


くららの
ブルーライトアップ

保護者の思いを

Aさん　私自身、保健師さんをはじめ、保護者の先輩などいろいろな人に相談することができたので、ストレスが少なくなり、過ごしやすくなりました。身近な人へ相談できる支援が続いてほしいと思います。

Bさん　病院の受付でも「困った人」「クレーマー」と受け取られるなど、大人になっても理解されないことがあります。早いうちに本人や家族、周囲が特性を知り、困り事への対処法を身に付けることで、生きづらさは随分減ると思います。

Cさん　学校生活では、担任の先生が替わったり進学したりするたびに、子どもの特性や必要な配慮を一から説明しなければならないことがあります。本人が安心するための方法や、これまで有効だった支援を、学年や学校を越えて引き継ぐ仕組みが必要です。